せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42-2590
第155号・平成14年8月1日

年表で読む 古平の歴史

《61》

タラ漁

■世界中の食卓に

浜の人であれば誰でもすぐにタラの見分けはつきますが、タラの仲間は四つの種類（属）に分けられます。

マダラ・スケトウダラ・コマイ・カワメンタイですが、カワメンタイ以外は北海道や東北地方のような寒い海に住んでいてよく知られています。

タラの仲間は深い海底に住んでいて獲ることが難しかったのか、タラの名前が本に出てくるのは千年くらい前からのことだそうです。

しかし、味が淡泊で魚くささがなく、いろいろな料理にも向くことから世界各地で賞味されています。その主な漁場は大西洋北部で、以前、タラ漁をめぐってその海域で国際紛争が起きたこともあります。

■古平のタラ漁

大正の中ころから昭和一〇年代までは古平でもタラ漁が盛んで、全国的な民謡としての『たらつり節』もうまれましたが、タラ釣り漁についての記録などはほとんどありません。

昔、タラ漁を実際に経験したという人も今は少なくなってしまいました。

いま遊漁船を経営している松田清さんは、「俺たち若いころは、釣ったタラを船倉から上げるのに苦労した（それほど大きいタラが獲れた）。だけど真冬の日本海でのタラ釣りは辛かった」と言います。

確かに大きな鍋で鱈汁を作り、鱈頭（たらかしら）を入れると鍋からあふれ出る程の大きさはありました。

古平町のタラの漁獲量についても、昭和八年ころからはスケソウと合計したものがあるだけで正確な数字は不明ですが、塩蔵や棒鱈（腹を開いて内臓を取って干す＝棒干し）、開き（ひらき＝背中から割き身を開いて干す）などの外、笹目（えら）や胃袋（チュウと言っていた）の乾物、肝油の製造などが盛んでした。

■古平でのタラ漁の始まり

寄せ集めた記録から見ると、安永九年（一七八〇）、ふるひら（古平）場所の知行主であった新井田大三郎の出産物の中に鱈油があり、寛政一一年（一七九九）には干鱈が作られたことが書かれています。

そうなると古平では、今からざっと二二〇年くらい前にタラ漁が始まったといえそうです。

天保九年（一八三九）、古平場所を請け負っていた岡田家の産物の中に「鯡（にしん）、串貝（ホタテの貝柱干しを串に刺したもの）、鱈、カスベ、イリコ（ナマコを煮て干したもの）、秋味」とあり、すでにタラが重要な産物であったことがわかります。しかし、その漁獲方法や産額はわかりません。

■明治期のタラ漁

タラは貯蔵や輸送にも便利な干鱈の生産が主でしたが、当時の漁業税は船に対して課税されれ物納でした。

明治一三年には船一隻について、一二月から五月までの着業船は干鱈六〇束、二月から五月までの着業船は四〇束と定められていました。

鱈油税は船の大小によって、生産された鱈油の一割から一割二分でしたが、その後は船一隻についての税に替わりました。

タラは肉に脂肪分の少ない魚ですが、その分内臓（魚のあぶらと言っている肝臓）には良質の脂肪分が多く、早くから鱈油（精製されたものが肝油）としてこれも重要な産物でした。

しかし、ここにひとつの問題が出てきました。それは、タラ釣りをする漁夫のほとんどが越後地方からの出稼ぎで、漁労技術を持った者が古平に定住しないことでした。

〈続く〉

当時の世相を見る

【56】

高野名幸作さんの日記から

〈大正一〇年〉

5／4　建網は投網しているが鰊模様はないようで、近々網を揚げるだろう。歩方の連中は網洗いを始めている。刺網もそろそろ後片付けをしている。

5／5　寒い風が吹き、海は時化になった。熊さんは出面の人たちを連れ、農園でリンゴの枝切り。建網もいよいよ切り上げになるので、綿糸類がよく売れる。本年の鰊漁獲高は建網一か統平均で四〇〇石ぐらい、六〇か統で約二四、〇〇〇石。刺網一一、〇〇〇石、二五〇軒として一軒当たり約四〇石、総漁獲高は三五、〇〇〇石は確実だろうとのこと。後志では第一位の漁だ。前半は良くなかったが盛り返し、実に幸運であり喜ぶべきことだ。初めはあまり漁の無かった建網も漁があり、近頃は鰊製品も暴騰しているので良かった。鰊粕三、〇〇〇円、胴鰊二、三〇〇円もするので景気が良い。

5／7　快晴。今日は南風が吹き暖かい。大正八年の古平大火の三周年に当たる記念日だ。実にイヤな記念日だ。恵比須神社で鎮火祭がある。夜、火防組合で町内を特に巡視をする。

5／8　この頃は日の長いこと。そして気候もよろしい。今日は学校も休みなので、子どもたちは畑へ行き、池のコイやドジョウをすくって遊んでいる。一日中遊んでいるので、夜は疲れて早く休む。こんな時代は一番楽しいときだ。鰊漁も切り上げで、店の方も綿糸、網などが出る。今日は南風で日中暖かく、夏のような一日であった。納屋下ろし、網片付けで町中は忙しい。

5／11　農園ではイモの植え付けだ。町では身欠抜きや身欠の結束に忙しそうだ。夕方から雨になったが、久しぶりの雨で火の用心にもよい。新聞によると各地で火事があったようだ。

5／13　出面を頼んで農園行き。㋑山口さんから建網用具の注文がある。品物を揃えて勉強すればこれからも見込みがある。経験も積んだので、明年から品揃えも十分にして売らねばならぬ。

5／14　農園が忙しいので、皆が農園へ出かける。店も暇になった。海産物も出回っているようだが掛け売りの代金の方は一向に入らない。役場で害虫駆除の講話があり、ソーダ液と除虫菊を混合したものをリンゴに使うと、虫にはずいぶんと効能があるとのこと。

5／17　ダシ風が強く吹き砂塵（きじん）を飛ばす。アバ縄は安いとはいえないが、品不足で売れ行きが良いので三〇〇丸程買い入れることにした。一丸で五〇銭ぐらいのもうけになるだろうから思い切り買った。帳簿の下調べをする。本年まで一五、〇〇〇円程の貸し売りがある。大抵は入金の見込みだ。一〇時頃になり風も止んできて安心した。

5／23　古平、積丹、美国方面は、全道で一位の漁があったということで、行商人の売り込みが多い。市況も製品の売れ行きが良いせいか、金回りも良く、掛け金の入りも早く、近年珍しい。今日も二〇〇余円の入金があった。町には瀬戸物売り、下駄売りなどの外、支那人の行商が入って来て実に景気が良い。

5／24　鰊漁は大漁。製品の値段はよし。米や縄、むしろ類は安く、実に漁業家にとっては豊年だ。それに、今年は鰊漁期の天気も良かったので魚粕の干し上りも早く、売れ行きも良く、刺網の方は、大抵全部の製品を手放したので金回りも良い。今日も八〇〇円余りの入金があった。漁さえ良ければ、漁師相手の商売はやり易い。店の方も客で忙しい。

5／25　今日も一、一〇〇円余りの入金があり、島泊からは五〇〇円の入金があったが上得意先である。明年からはますます得意先廻りをして、勉強して売らねばならぬ。リンゴのつぼみもかなりふくらんできた。町では海産物が盛んに出ているの

で、仲買人、馬車屋、自転車屋もなかなか景気が良い。海には二、三隻の汽船が入っていて、海産物を積み込んでいる。

5／26　快晴。天気も毎日毎日よく続くものだ。畑作ものは少しも芽が出ないので困る。店は今日も掛け金がポツポツ入り、合計で九〇〇余円の入金があった。午後、銀行へ行き㊗へアバ縄代金一、〇〇〇円を送金する。農園へ行くと八重桜、サクランボが花盛りだ。14号、58号は三分どおり花が開いた。この分だと今年は良さそうだ。

5／27　この頃は一年で一番日の長い季節だ。朝のうちは快晴だったが昼頃から雨が降り出した。久し振りの雨で畑作物にはよい雨だ。先日、子どもたちと写した写真が出来て来た。よく出来た。積丹から小網用の道具類を買いに来る。夜、鶴間君と野沢借家での浪花節を聞きに行く。一一時頃帰る。雨が降ったので道路が悪い。

5／28　今日も雨になった。作物には実に良いことだ。今年は近年になく金回りが良いのか、掛け金も割合早く入金する。六〇〇円程の入金があった。小樽から下山口の店員が来て、雑貨類を少し注文する。

5／29　曇天で寒空だ。東洋漁網から刺網の包みが二個着いた。竹行李（たけごうり）、柳行李がよく売れる。鰊漁期も終わり、カムチャッカ、樺太方面へ出稼ぎに行くので売れるのだ。夕方から海は大時化になり、波の音が店まで聞こえる。

5／31　洗面後、農園へ行って見る。まだ早いので朝露が多く、草の中に入ると雨にぬれたようになる。14号、58号は見事な花盛りだ。この分だとこの二種類も豊作かも知れぬ。

6／1　早や六月となった。鰊漁は刺網も漁があり値段が良かったので豊作だ。従って町内の景気も申し分ない。行商人もずいぶんと多く入り込んで来ていて相当な売り上げだという。午前中、畑の馬耕を頼む。午後、農会の畑と支店の池を見て廻る。八重桜が盛りだ。銀行へ行ったが忙しいこと、ここずうっと客が切れないとのこと。岩井さんから第十二平安丸が赤泊を出港、古平で荷揚げする荷物もあるというので倉の後片付けをする。風の寒い日である。

6／2　明日は運動会だというので、どこの家でもそのご馳走作りに忙しいようだ。景気が良いので物売りもずいぶんと歩いている。夕方、高橋さんから、「ナワアゲタ〇一センエンアカドマリギンコウアテスオクレ」と電信が入る。「ミタギンコジカンオクレタアス〇ヤル」と返電した。品物が払底しているので値上がりしたらしい。

6／3　朝五時に花火が揚がる。今日は学校の運動会だ。子どもたちも早くから起きている。今日は幸いにも一天雲もない上天気だ。銀行へ行き、一〇時頃から運動会見物だ。町内からは大変な人出だ。鰊漁も良かったので賑やかだ。家ではいなり寿司を作った。

6／5　起床五時、朝は三時過ぎには早や夜が明ける。今日から農園の草取りだ。畑の馬耕は全部で五〇円ということで払う。新開町㊀の裏で相撲大会があるというので子どもたちを連れて見に行く。大勢が集まっている。昼頃から風が強くなり、火防組合で町内を廻る。夜、部落会役員会があり父が出かけた。

6／7　起床五時半、昨日は暴風となり、その後雨になるかと思っていたが今日は一天雲のない快晴になった。風もなく実によい天気だ。店は出稼ぎに行く人が行李（こうり）を買いに来る。竹ごうりがよく売れる。午後から美国へ掛け取り（集金）に行く。三〇〇円余りが入金した。上首尾であった。

6／16　古平局で電話の増設のくじ引きがある。一〇台のところへ四〇人余りの申し込みがあるので大騒ぎ。大〆のことでゴタゴタが起きる。

6／21　今日も珍しいような良い天気だ。大謀用のアバ縄が着いたので、余市の阿部さんへ書面で通知する。漁も今は暇な時期だかコナゴが獲れている。コナゴ網も六、七反売れる。夜、三山神社宵宮祭で、子どもたちを連れて五〇段からの階段を上って参詣する。ちょうど十六夜の月が沢江の山から上ってきていて実に景色がよい。浪花節の余興があり、飴を二〇銭買って帰る。

（以下次号）

木村シゲさんの語る 戦前の農家の暮らし 中

◇彼　岸

春の彼岸の頃は馬そりで堆肥を田んぼに運んだりして、農作業の準備にかかるが、まだ田んぼや畑の仕事がないので少しはゆっくりできる。

彼岸にはまんじゅうを作ってとなり近所に配る。いっしょにおはぎも作るが、これは仏前や神棚にお供えしたり、家族が食べる。あそこの家のまんじゅうは甘ぐないとか、かっこーわるいまんじゅうだとかワイワイ言いながら、それでも久し振りのご馳走なので喜んで食べた。

まんじゅうは米をついて粉にし、あんこは黒砂糖か中白（ちゅうじろ＝白砂糖ほど精製していない黄色い色をした砂糖）を使い、あずき一升に砂糖一斤（約六百グラム）入れる。これではあんまり甘くないので、塩を少し多めに入れた。

黒砂糖を買って置いたりすると子どもたちは、「黒砂糖どごさ置いだァー」と、家の中を探し廻っていた。

◇田　植　え

雪が解けて乾くと田んぼを起こす。プラウで起こすまではみんなくわでやっていた。朝から晩まで大変な力仕事だった。馬で道具を使うようになってからはずいぶん楽になった。

〈プラウ〉人力に頼っていた農耕作業に大きな威力を発揮した。これは一般的な再墾用プラウ

田植えが始まると日の長いこの時期、明るいうちは仕事だった。毎年、だいたいきまった時期に植えてしまわないとだめだから、植える時期を見て手間貸し（忙しいときは仕事を調整して、お互いの仕事を手伝う）したり、田んぼの多いところは出面を使っていた。

田植えは慣れた人でも一日いっぱい、朝の六時から夕方の六時半ころまでやって七～八畝（せ＝二一〇～二四〇坪）ぐらい植えた。植える分の苗取りをすると一畝は少なくなる。苗取りをする人は、まだ手元の暗い三時頃から始める。

女の人は昼の弁当のにぎり飯を作り、人を頼んだときはその分も用意する。おかずは毎日すし鰊だった。鰊の獲れる年は安いときに買うが、四斗樽で四、五樽も漬けた。焼いたり煮たりするほか、三平汁にして食べることが多かった。

そのほかおやつとして何か出すが、トウキビ、ダイズ、アワなど煎（い）ったものを浅い箱に入れ、その上から黒砂糖の煮つめたものをかけて固まらせ、それを金づちか鉈（なた）で叩いて割ったものを食べた。田植えの終わる頃、お昼におはぎを出したりする。　田植えは農家の大事な仕事なので、今でも親戚やつき合いのある家で田植えが始まるとビールなど届けてお祝をする。田植えが終わると赤飯や餅などをお返しとして持って来てくれる。

◇稲　刈　り

刈るだけだと田植えの倍近くはできる。刈り取った稲は穂を下にして一〇把程ずつ集めておき、二、三日してからはさ掛け（丸太を横に組んで、それに稲を掛けて乾燥させる）をする。乾燥した稲を脱穀するが、脱穀作業は夜の一〇時、一一時までやった。脱穀機も昔は足踏式だったが、昭和一〇年頃から石油発動機やモーターになり作業はうんと楽で早くなった。スケソ時期なると、明太（めんたい）を作る納屋に田んぼを貸している家も何軒かあった。（次号へ続く）

ぶらり寺の一人旅

中尊寺

室屋忠雄

奥州平泉にある中尊寺は、藤原三代の菩提寺としてよく知られていますが、仙台伊達藩よりむしろ繁栄した一族ではないかと思うのです。

昭和三三年には別格大寺に昇格し、天台宗東北大本山の称号を与えられている、由緒あるれっきとした寺です。

歴史でも有名ですが、藤原三代目の泰衡が父秀衡の遺命にそむいて、義経主従の住む衣川の館を襲撃したのです。

戦いは多勢に無勢、伝えられる弁慶の立ち往生と言われる奮戦もむなしく、泰衡の軍の圧倒的な勢力の前に破れてしまいました。義経は館に火を放し、妻子らと自刃してしまいました。

拝観の折に中尊寺の一番奥にある白山神社に登ると、眼下に流れている川が衣川で八百年前の古戦場です。『奥の細道』で詠んだ芭蕉の『夏草や兵どもが夢の跡』の有名な句にも出会うことができます。

昭和二五年から、ミイラとなった藤原三代の遺体の学術調査が行われ、中尊寺金色堂須弥壇(しゅみだん)の下、真ん中が清衡、向かって左が基衡、右が秀衡の遺体と推定されました。

秀衡の棺の中の首桶には息子の泰衡の首が入っていたそうですが、鎌倉幕府によって処刑されたその首には七か所の傷跡が残っていたそうです。

不思議なのは、平泉で落命したはずの義経が、北海道や中国などで北行伝説として残されているのはなぜなのでしょう。

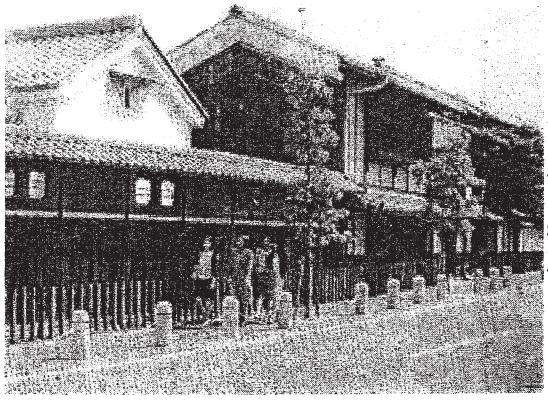
<中尊寺文化の特質をよく表現している生肌(ひとはだ)大日像>

近江八幡市から古平の取材に ケーブルテレビで市民に紹介

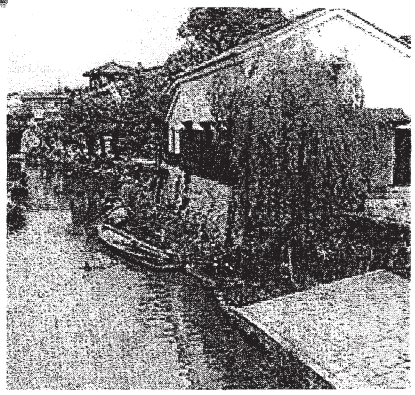
今から三百年程前、松前藩の時代に古平場所として古平の地で、盛んに商業活動をしていたのが滋賀県の近江八幡に本拠を持つ岡田家でした。

厳島神社(元は恵比須神社)を創建し、岡田家の関係者が石灯籠や鳥居を寄進しています。

一昨年、市長さん方が訪れて岡田家ゆかりの地を見て廻り、



<時代劇にでも出てきそうな近江八幡市の古い街並>



<琵琶湖の水を引いて八幡堀>

昨年は、市議会関係の方々が視察の途中立ち寄られました。

そして、市内のケーブルテレビで古平の紹介をしたところ市民から大変な反響があって、もっと古平のことを知りたいということでした。それで今回、市史編さん委員会がケーブルテレビ会社のカメラマンを連れ、撮影に古平を訪れたわけです。

放送時間は二〇分程だそうですが、厳島神社での撮影にはお忙しいなか横川さんにもご協力いただきました。

庭菜園として耕され、ついにグランドも耕作地として貸し付けられることになりました。川原の石の多い土地でしたが八〇戸余りがここで耕作をし、戦時中の貴重な食糧の供給地としての役目を果たしたのです。

＜古平中学校建設敷地の標柱＞

□中学校校舎の新築

戦後の教育改革で六・三制の義務教育が実施され、それまでの国民学校は小・中学校に分離し、昭和二二年、新制中学校としてスタートした古平中学校は、古平小学校に間借りして開校しました。

折から戦後の混乱期でもあり、当時はどこの市町村も校舎建築の余力はなく、古平中学校でも教室の不足から止むなくすし詰め学級や、二部授業を行って急場をしのいでいたのが現状でした。そんな時期に思いもよらない西部方面を全焼する火災が発生し、校舎新築はさらに遠のいてしまいました。

しかし、その大火の復旧の中で、伊藤町長の英断で中学校新築が計画され、関係者や町民らによる古平中学校建設協力委員会が結成されました。

校舎建設用地として、立地条件から中島グランドに隣接する旧競馬場周辺が最適とされ、昭和二六年の雪解け早々に＜古平中学校建設敷地＞の標柱が建ったのです。機は熟して、校舎建築の募金や敷地の整地作業が勤労奉仕により進められました。

古平町弘報第二号（昭和26年8月）には「…校舎の地均しは、我々の汗と油を注いだ“聖なる地”でなければならぬとの強い空気によって勤労奉仕を受け、完成を見たことは当事者としてまことに感激に堪えないところで、＜以下略＞」

□教育発展の地となる

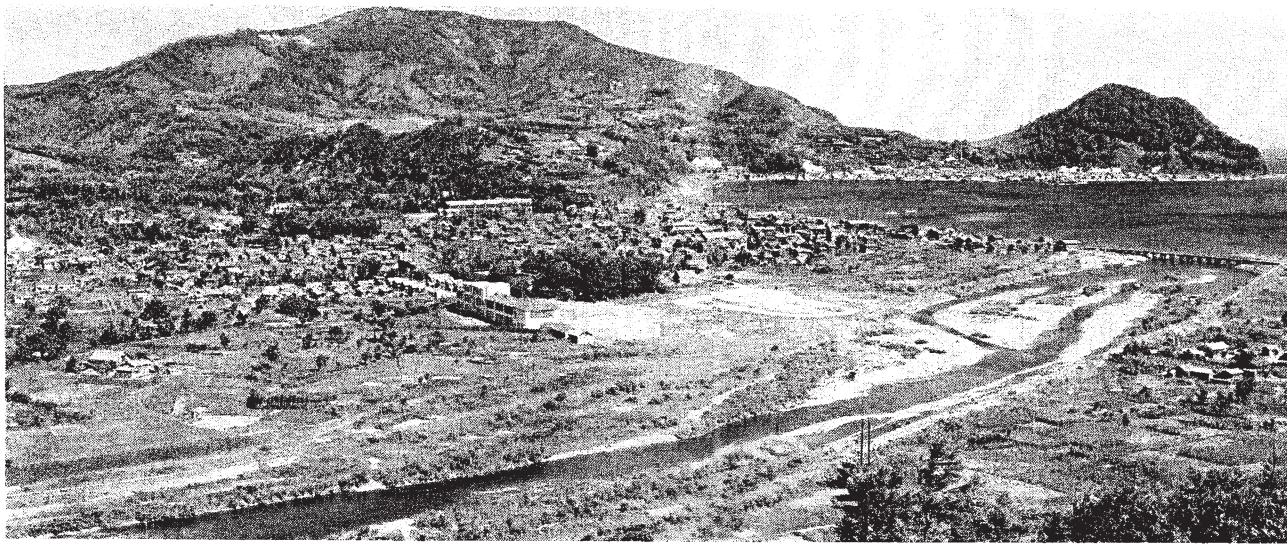
旧競馬場はグランドとなり、食糧難の時代には町民を救う畑に変身し、戦後には、心身を躍動させ、若い声が響き渡る新しい教育の発信地へと姿を変えたのです。

【古平中学校建設当時の概要】

▽第一期工事
木造二階建、鉄筋一部三階建
昭和26年7月18日着工
同　27年6月20日竣工
総坪　数　六四五坪
工事費（付属住宅共）
一二八、四三九、〇〇〇円
生徒数
昭和26年　六一一人
同　27年　五九九人

▽第二期工事
屋内体育場（廊下共）
木造平屋建ジベル小屋組（廊下共）一六四坪
昭和29年9月6日着工
同　30年3月31日竣工
生徒数
昭和29年　六二〇人
同　30年　六四九人

▽第三期工事
普通教室・特別教室
鉄筋コンクリート
ブロック壁二階建
総坪数　二一四坪
昭和36年3月7日着工
同　年11月30日竣工
生徒数
昭和36年　六六五人



古平いろはうた

14 競馬場中学生がランニング

□グランドの建設へ

「昭和一一年六月、古平小学校保護者会の役員会が開かれた席上で運動会の会場として、今の種田の干場（通称・本陣の干場）では狭いので公設のグランドが欲しい。という意見が出た。そして、グランドの候補地として旧競馬場辺りがいいのではないか。また、建設が決まったら、保護者会としても整地作業に尽力しよう、ということが話し合われた。」（6／25）

「その後、学校や保護者会を中心にした協議が行われ、保護者会が発起人となってグランドを新設することが決まった。建設費用としての概算五百円は寄付でまかなうことにし、会員等による労力奉仕をすることなどを申し合わせた。」（10／24）

「整地作業には町内会などからも労力奉仕に出ることになり、雨天であったが一三人が出て作業をしている。」（11／15）

「グランドの地ならしや石拾いに高等科の生徒も出て、先生方といっしょに労力奉仕をしている。一般の人も四〇人程が参加している。」（11／17）

その後の経過ははっきりしていませんが、行幸記念事業として町によって工事が継続され、翌、昭和一二年六月五日、「修祓式が行われ中島グランドと命名された。終って青年団による落成記念運動会が行われ、売店も二〇数軒立ち並んだ。町民の労力奉仕による延作業人員千四百人余り、整地面積約三千坪。」（6／5）

以上は、高野名幸作さんの日記によるものです。

□竹林校長の回想記

グランド建設について当時の竹林校長は、古平小学校開校九十周年記念誌に寄せた回想記に次のように書いています。

「運動会にもグランドを持たないということが痛手でした。先生方と相談して古平川のなかの島の砂利空き地を利用し、自力で運動会場を造ろうと子供、有志と語らい、秋の終り先生と上学年の生徒一団となって工事に着手、十日位働いたところ、聞きつけた男女青年、父兄有志が自発的に続々鍬を携えて馳せ参じ、結局挙町一致体勢に早変わり、降雪前に大体の格好ができ、翌年融雪を待って仕上げに取りかかり、六月の運動会は皆の汗の結晶であるこの立派な土の上で、未曾有の人出で盛大に行うことができました。あれから三十年なにもかも夢のようです。」（昭和四〇年）

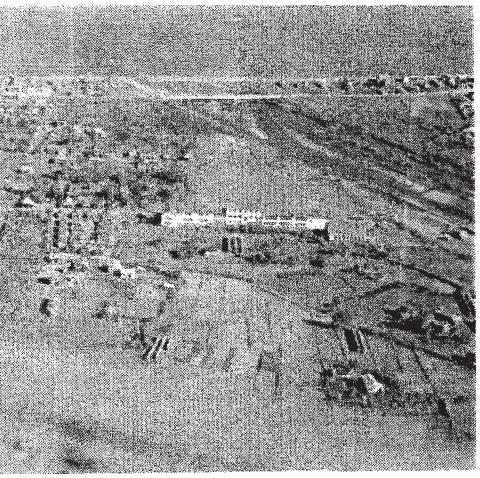
□河畔に建つモデル校舎

草地をならした程度の競馬場では、当時多く飼われていた農耕馬による競馬や輓馬大会が行われ、娯楽の少なかった町民を熱中させたようでした。

時代は移ってグランドとなり、それまでは鰊粕干場が運動会や名物の自転車競争などに利用されていましたが、グランドが出来たことで陸上競技の団体も生まれ、学校や青年団体、一般町民のスポーツへの関心も高まり、日常の活動も見られるようになりました。

□食糧難から畑に転換

ようやくグランドもなんとか完成というとき、戦争による全国的な食糧難に見舞われました。町なかの僅かな空き地はもちろん、遠く山の斜面までが家



＜田園風景の中に建つ古平中学校上空から＞ ―昭和４３年撮影―

＜沢江町高台から写す、中央やや右が竣工間もない頃の古平中学校校舎とグランド＞ ― 昭和２７年撮影 ―

夫の叙勲に 在りし日を想う

大澤文子

梅雨もあけ夏本番という今日この頃、夕暮れの爽やかな空を窓越しに見上げながら、ふと走馬灯の如く過ぎ去った日々にふれてみるのも、世の常であろうかとペンを執った。

私共一家が古平へ越して来た折には、小樽漁連組合の出張所はあったが、不漁続きのためか昭和二十三年には閉鎖されたのだった。あとはどうなることかと心配していたが、夫と共に事務員をしていた本間寅雄氏は早々に町役場吏員として勤めることができ、ホッとしたものである。夫もまたその後、古平特定郵便局長としてのイスに任命されたのだった。

それまで古平郵便局長をしておられた小町勝治氏は、病後のご静養のため隠退されたのだった。間もなく夫は研修といって何週間か札幌へ出かけることになった。

心配だった私はその折、旅行鞄の中に仕立て上がりの丹前をそっとしのばせたものだった。夫の留守の間、子供達のことが心配だった。いくら海風になれてきたとはいいながら、かわるがわるよく風邪をひく。とくに古平っ児の次男はたびたび熱をだす。

そのつどわが家の離れに住む可児家のるみちゃんがよく手伝ってくれた。声をかけるとすばやく鰊漁のときの子供用のもっこを背負い、海沿いの断崖のふもとまで行ってくれたものだ。そこには朽ち葉が積もり、その下には夏でもいくらか融けない氷が残っている。るみちゃんはその朽ち葉をかき分け氷をもっこに入れると、がらんがらんと音をたてながら背負って来てくれるのだった。

ほどよい氷の欠けらに幼子の熱はすぐさがりホッとする。るみちゃんの暖かいお手伝いにはいつも感謝するのみだった。

その後、何か落ち着かない何週間か過ぎ、夫は研修を終え帰宅した。ようやく今までの静かな生活にもどったのである。

渚辺に
投ぐる魚の粗めがけ
降りくるごめの羽音しげしも

すばやくも
一羽が獲物咥へれば
競ふごめらは姦しく追ふ

夫はその後、古平特定郵便局長として大過なく、昭和二十三年から昭和五十五年六月まで、三十三年間勤め上げ退職したのである。

さりげなく
われに手渡す俸給も
この月最後と笑まひす夫は

あれから何十年経ったであろうか。私はいまその時のスクラップブックを繰り、ひとりしみじみ思い出にふけっていたのである。

そして烏滸がましいこととは思ったが、各新聞社が『春の叙勲受章者の喜びの声』としてとりあげて下さったことを、抜粋して記してみようと思った。

先ず「受章の感想は？」の問いに夫は、

「大変ありがたいことではあるが、現役時代に職員に良くしてもらったおかげであるから、私の功労なんてないよ…」と。

また、「一番の感想は？」の問いには、

「電信電話業務が分離した昭和四十六年のこと、職員が一挙に四十一人から十八人になったことである。だが周囲の職員が支えてくれたおかげです」

と、結ばれていた。

私はスクラップブックの記事を胸の痛くなる程、読み返していた。

そして『春の叙勲者受章』の折、東京まで共に出かけたことを今尚、心からその時の喜びをかみしめている現在の私である。

ここまで記しふとペンをおいた時、時計のメロディーが、だるそうな音色をたてて深夜の一時を報らせた。

戦中 戦後

泣き笑いの樺太漁場体験談

吉野慶一郎

◉アイヌから権利を借りる

刺網で鰊漁をしていたが、新たに古平から小建網を持って行くことにした。

樺太ではアイヌの人たちが漁業権を持っているので、その名義を借りたり、共同漁業の形で漁をした。以前からサケ漁は盛んであったが、鰊はあまりやってなかったようだった。

当時は古平の鰊漁が終わると、カムチャッカや樺太方面へ出稼ぎに行く人が大勢いたが、樺太へ網を持って行ったり、現地で共同で鰊漁をするという人も何人かいた。

◉樺太でスケソ漁

戦前は、古平だけではなく道内でのスケソ漁は釣りがほとんどで、網で漁をする人は少なかった。その頃は、もみじ子の多くは釣りのスケソを原料としていて、品質の良いものを生産していた。

樺太のスケソ漁は、古平周辺で釣りの終る二月末頃から始まり、三月と四月の二か月間がスケソ漁の時期であったが、その間はわずかの人が漁をするだけで多くの人は遊んでいるような状態だった。

樺太に住んでいる人たちはもともと釣りの方法は知らなかったし、また、現地の人たちの漁業の技術は一般に低く、特にスケソ漁については全く幼稚なものであった。

漁をするにも漁具や資材が無かったので、それらのものを小樽で買い入れ、現地の人たちにも漁の方法を教えた。

最初の年は延縄のざるや、樽のたが用の竹、明太を荷造るときに使うハギ（真っ直ぐなハギの茎で明太の頭を通した）を積み、ざるを編む職人の外に、もみじ子を入れる樽も無いので古平から樽職人二人も連れて行った。木材はあり余る程なので樽の材料にはこと欠かなかった。

◉スケソ大漁

樺太ではスケソは積極的に獲るということはなかったし、漁具も、また技術も極めて幼稚なものであった。

山川船頭の下で、古平から行った船が漁に出ると数倍の漁をして来るので、現地の人たちは皆びっくりする有様だった。そこで現地の人たちにも漁具を貸し与えたり、古平式のスケソ釣りの方法や技術を教え、獲って来たスケソは全部買うことにした。

釣りの餌にはイワシやイカの外に、スケソ漁の終わる頃に獲れ始める鰊も使ったが、餌の食いは大変良かった。

古平での漁より、沿岸から近いところでスケソ漁ができただけではなく、いくらでも釣れたと言っても過言ではなかった。

古平では三千尾も釣れれば大漁だったが、一叺（かます）一〇〇尾入りで一〇〇叺、一万尾は獲れた。もみじ子を製造するのに、現地の人はなれていないので、古平から熟練の女工さんを一〇人から二〇人も連れて行った。

◉明太は最上級

古平あたりから見ても、樺太でのスケソの加工は大ざっぱだったように思う。古平から熟練した女工さんを連れて行ってもみじ子の生産をし、朝鮮や支那（中国）へ送る明太（メンタイ）を作ったが、寒さの厳しい樺太は明太作りには実に好適だった。

獲ったばかりのスケソを水の中に入れて踏みつけるとうろこや表面のぬめりが取れ、身が柔らかくなって水分を多く含むようになり、また身が中骨から離れ易くなる。これを氷点下の寒い時期に乾燥させると冷凍と乾燥を繰り返し、乾燥しても身がホクホクして柔らかく、表面もきれいに仕上がり品質検査でも一等品が多かった。

◉山川船頭は神サマ

船頭の山川さんは小柄な人だったが、いざ漁へ出かけるとなると、見上げるような大男でも頭からどなりつけ仕事をやる人だった。何と言っても漁のウデが抜群なので、誰も文句を言う者もいなかった。※

和尚さんから聞いた 雨の日の怪談

池田テル

お盆が近くなると、菩提寺である禅源寺の今は亡き岳轉和尚さまが語られた、ある亡霊のことを思い出す。

私がまだ若い頃のこと。持役(じやく)にお出でになった和尚さまが、雨が降って来た外に目をやってはなにか考えておられたようでしたが、やがて、「私の体験じゃが――」と、ゆっくりとした口調で、お話しになったことがあります。

それはある日の夕暮れどき、和尚さまが一人でお寺に帰られる途中のこと。役場のところの角を曲がってまっすぐ寺へ向かったときから、自分といっしょに誰かの足音が付いて来る。雨が降ってもいないのにぴしゃぴしゃと水を踏み歩く音である。

これまでも寺にいて、近づいて来る亡霊の下駄の音など聞いたことがあるが、ここは道中である。と考えながら寺に着いたとき、その足音は消えていた。

出迎えた家人から、今日届いたという知らない人からの小包を開け、入っていた文を読んで今しがたの不思議な足音のわけがわかったと、そのことの由来をお話しになった。

永い間の念願であった古平――余市間の海岸道路の工事が着手され、難工事に挑んでいた豊浜の海辺に近い土砂の中から、白骨化した人体が見つかった。古平のお寺に預かることになり、禅源寺住職の岳轉和尚がその遺骨を引き受けられた。

以来、無縁仏として大切に供養してこられ、それとなく身元を調べていたところ、本州から鰊場に来ていた若者が行方不明になっていることがわかり、役場とも連絡し合って、遺骨を遺族へお返しすることができた。

和尚さまと歩いた足音は、これまでお世話になった遺骨の仏さまが、小包といっしょに寺に着いたが、私（和尚さま）に早く逢いたくて、道へ出て迎えに来たものでしょうね。」と、和尚さまは少し明るくなられ、静かに合掌された。

豊浜は、昔から時化による遭難が多かった。また心切ないトンネル事故もあった。和尚さまをしのんで謹んで合掌。

※ 漁でうちの船がいつも大漁するので、野田の町でも山川さんの名前を知らない人はなく、「吉野漁場の山川船頭は神サマだ」という評判までたった。

しかし、そんな評判にも驕(おご)るような人ではなく、「いくら獲ったということよりも、腹にいい子（卵）の入っているスケソを獲るのがオレの仕事。毎日が樺太の海との格闘だ。」と、親方思いで、また研究心の常に旺盛な人だった。

事実、その言葉どおりの実績を挙げるので、やはり山川さんは名船頭だったと言える。

山川さんは酒が好きでよく飲みに出かけ、私も時々は付き合うが余り飲めない方なので、行きつけの飲み屋さんには「山川船頭のツケは全部家の方へ回して――」と、頼んである。

ところが翌年、今度は山川さんの奥さんが樺太へ行くと言い出したという。（続く）

訂正　前号の記事の記事を次のように訂正いたします

㊐ 真岡郡野田町で、人口は約一万人、

㊗ 真岡郡野田町で、人口は約三万六千人、（真岡郡の人口が三万六千人です）

編集雑記

▽八月はホントの夏になりそうですが、冷房の効き過ぎた中で祭りも終わってしまいました。

▽『せたかむい』の読者から、「あんたの載っているの見たよ」という手紙や電話があるそうです。ありがたいことです。これからも、大いにふるさとの話題を語ってほしいものとご期待し、また願っております。

▽資料のご寄贈お礼

高野名正治さんから古い文書類を多数ご寄贈いただきました。どうもありがとうございます。

・封書　九通・証書証文　四六通
・大福帳などの帳簿類　六冊
・その他文書類　一六点

▽七月二十三日はトリ肌で大暑を迎え、八日はもう立秋です。

短歌

古平町岬短歌会

暖かき春は来たりて膝も癒え朝あさの散歩に小鳥らの声
早々と春は来たりて満開の桜の上の満月仰ぐ
池田テル

根分けせし芍薬の花八重と一重咲きし不思議を友に語れり
リラと藤競ふがごとく咲き誇る我が小庭にも初夏の来る
田中香苗

幹くねらせ伸びたる藤に紫の花房はらりほろほろと散る
若葉風やさしく吹ける群来の里荒家を囲む野すみれの花
堀典子

俳句

古平ホトトギス会

逆縁も私の運命墓洗う　斉藤波留
鉢取れば蚯蚓くねくね動きけり　山口悦子
命日の墓にうつりし百合の花　越野敏雄
花胡瓜今日の手入れはこゝまでと　大和田絵伊
小鴉の首をかしげてトマト睨る　関口勝志

歩行器を止めて廊下に佇めば行き交ふ人ら皆忙しげなり
奥山きよみ

勢ひ咲く白しゃくなげの花の下接ぎ木せし赤ふたつほころぶ
鈴木時子

抱きとりしみどり児胸にあたたかく眼動かさず我を見上ぐる
東美知

雨降らずふくらみ遅き芍薬の薄紅色に小さく咲けり
丹後初江

ベランダに青大将の衣更　室谷弘子
すてがたき籐椅子居場所ふさぎけり　仲谷比呂古

福井幸平五句

石垣と石段の寺葉桜に
籐寝椅子主の見えぬ窓辺かな
わしずかみしぼりこまれてキウリもみ
いか襖雄冬連峰途切れけり
夏霧に雄冬連峰とざされし

古平町史年表

― 3 ―
213～157年前

☞ ― 213年前 ―　寛政元年（1789）
◆本堂恕親の写したエゾ地図に「古比羅(ふるひら)、吉田藤太知行場所」とある。

☞ ― 212年前 ―　寛政2年（1790）
◆「蝦夷地改正」の定めにより、丸山頂上に今も残っている烽火場(ほうかば=のろし台)が作られる。

☞ ― 210年前 ―　寛政4年（1792）
◆古平場所請負人恵比須屋（岡田）治助とある。

☞ ― 208年前 ―　寛政6年（1794）
◆知行主の新井田喜内と、恵比須屋は古平場所を文化6年まで13年間請け負う契約をする。

☞ ― 203年前 ―　寛政11年（1799）
◆古平場所が幕府の直轄地となる。

☞ ― 196年前 ―　文化3年（1806）
◆幕府目付・遠山金四郎、勘定方・村垣左大夫らが西蝦夷地を廻り、「古平は運上家、漁小屋、アイヌ小屋が多く見られ、大変良い場所です。」と日記に書いている。

☞ ― 195年前 ―　文化4年（1805）
◆幕府は近藤重蔵らに西蝦夷地の調査を命じたが、その日記に古平のことを「新井田瀬平の知行地、岡田家の松前支店支配人源兵衛、古平場所支配人五平」とある。

☞ ― 181年前 ―　文政4年（1821）
◆幕府は蝦夷全島を松前藩に返す。

☞ ― 163年前 ―　天保10年（1839）
◆「東西蝦夷地御場所運上金揚高並夷人々控」によると、
一、フルヒラ蝦夷家　六十六軒、
　　男百七十人　女五十三人

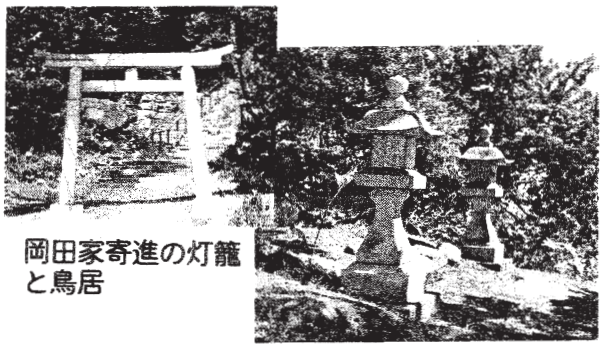
☞ ― 157年前 ―　天保14年（1843）
◆松前藩は鰊漁に大網（建網）を使うことを禁止する。

☞ ― 158年前 ―　天保15年（1844）
◆古平運上家支配人城川長次郎が、港町恵比須神社（現在の厳島神社神社）に御影石の灯籠一対を寄進する。

☞ ― 157年前 ―　弘化2年（1845）
◆古平運上家が港町恵比須神社に御影石の鳥居を寄進する。
◆余市場所支配人の二代目林長左衛門が、運上屋～ユナイ峠間の山道を切り開く。

南北が反対になっている当時の地図

烽火所跡案内板


岡田家寄進の灯籠と鳥居